

河童伝承における人的要素

中 村 禎 里

1. 「河童聞合」の河童
2. 河童と格闘した人たち
3. 本草家の河童
4. 本草家と一般人の河童イメージの比較
5. 水辺の山人
6. 人形と被差別民
7. 平家の亡魂
8. まぼろしのキリシタン
9. みじかい結末

論文要旨

(1) 古賀侗庵の『水虎考略』(1820年成立)の冒頭にある「河童聞合」は、これまでの河童研究において、ほとんど無視されてきた。この文書は、文化2(1805)年に日田代官・羽倉秘教の指示をうけた地もとの豪商、広瀬桃秋・森春樹などが、筑後川・山国川流域の河童体験者と面接し、聞き取りをおこなった結果の報告書である。「河童聞合」および同時代の本草書における河童の記載の分析、両者の比較にもとづき、つぎの問題点を解明しようとした。すなわち第一に、近世後期の河童イメージが、地域・階層の相違に応じてどのように異なるか。第二に、そのような複数の河童イメージが、いかにして成立し、また相互に影響しあったか。

(2) 九州の大河川中流域の人びとは、近世のあいだ一貫して特定の河童イメージを持ちつづけていたようである。それは水辺に住むサルヒト、またはヒト的サルのイメージであった。河童イメージは、もちろん人びとの長きにわたる多様な生活体験の累積のなかから形成された。したがってその起源について、単一のモデルをもちい説明し去るわけにはいかない。あえて要素に分割すると、モデル・プラス・幻想ということになるだろう。モデルにかんしても、サル・カワウソ・スッポンなどの動物と、農民・都会民の目には彼らと異質の存在と映る人びとの両方を考慮しなければならない。本稿においては、このうちヒト的な要素の実態について考察した。かくて浮かびあがってきたのは、山間に住み、河川流域において回帰性の移動をおこなう人びとである。くわえて、山に潜伏していると想像されていた落人やキリシタンの幻影も、河童幻想の成立に関与していたかも知れない。

(3) これとべつに近世中期以後、江戸の知識人によって、頭に皿を持ち背に甲を負う河童イメージが造作され、このほうのイメージがしだいにサルヒト、ヒト的サルのイメージを圧倒し、普遍性を得ることになった。